

スポーツ文化の風を発信する

NITTAIDAI

ニッタイダイ 2001年 春

02

CONTENTS

新学長からのメッセージ — 1

SPECIAL ● 21世紀のNITTAIDAI — 2

特集 ■ “21世紀創造型大学”

＜大学院博士後期課程完成＞

研究科長、3学系の主任教授からのメッセージ／修了者の声

＜スポーツ局の成果と課題＞

新たな陣容で、21世紀に大きく一歩踏み出す

INTERVIEW ● アスリートたち — 9

Active People ● OB・OG紹介 — 11

OPINION ● 「介護等体験」について — 13

News Eye ● 企業スポーツと地域共生型の今後 — 14

NEWS ● 下半期ニュース — 15

クラブ情報 ● 下半期クラブの主要大会成績 — 17

MY VOICE ● みんなの広場 — 18

INFORMATION ● dot. NITTAI — 19

新学長の挨拶



NITTAIDAIが21世紀に輝く大学となるよう、その実現を図りたい。



暖冬になると長期予報が伝えたはずの今冬は、殊のほか厳しい寒さが続き、東京でも数回の積雪を見たほどでした。それでも季節は確実にめぐり、21世紀最初の春が鮮烈な明るさをもって訪れました。寒い冬であっただけに春の到来を強く実感する4月です。

「日本体育大学に学ぶ学生諸君、保護者そして常日頃本学に対して温かいご支援をいただいている関係者の皆さん、はじめまして。」という言葉から始めるのが私にはふさわしいと思います。平成13年度から、つまりこの4月1日付けで本学の学長に就任いたしました長谷川でございます。私は、今年の1月末、国立国会図書館を最後に退官するまで、33年弱の間、文部省、文化庁、千葉県教育委員会、放送大学、東京大学など、教育、学術、文化、スポーツを所管する文教行政の場で仕事をしてきました。このような私が、このたび思いがけず本学にお招きをいただき、高等教育の最前線での任務を与えられたわけです。大変光栄であることに感謝しつつ、その重い責任を考えると強い緊張を覚えざるを得ません。—現状を冷静に、正確に見定め、将来の方向を展望しつつ、課題とその解決に向けての方策を探り、関係者の理解と合意を得ながら施策としてその実現を図っていく—。これまで私が長年にわたり携わってきた“行政”を私なりに一言で表現すればこのようなものであったと思います。勿論これは決して簡単なことでなく、納得できる成果をあげることは殆ど無かったというべきかも知れません。しかしながら、本学が21世紀に輝く大学として発展していくよう少しでも貢献することを使命とする私にとって、このような行政の経験が必ずや生きることもあろうと確信しています。

本学のすべての学生、教職員が生き生きと活動し、充実感を日々味わいながらキャンパスでの生活を過ごす中で、それぞれの持てる力を存分に発揮することができる大学、そのようなニッタイを目指して皆さんと一緒に努力していきたいと願っています。

学長 長谷川正明

Profile ● はせがわ・まさあき

昭和18年生まれ。東京大学教育学部卒業。

1968年4月文部省に入省。外務省、千葉県教育委員会、文部省、文化庁、放送大学を歴任。1994年文部省官房審議官(学際局担当)、96年東京大学事務局長、97年文部省生涯学習局長、98年国立国会図書館専門調査員 調査及び立法調査局 文教調査室主任。本年1月に退官し、現職に至る。1980年4月から1年間、日本学術振興会からの派遣により、英国の科学研究振興機関であるSRC本部(在スインドン)に滞在し、英国政府による学術振興政策を学ぶ。海外への公務出張は、アジア、ヨーロッパ、北米など24ヶ国に及び、さまざまな国際的な学術委員会に政府代表として参加している。

＜主要論文＞「主要国における大学の研究機能と学術研究体制 イギリス」(『高等教育研究紀要』第13号、財団法人高等教育研究所)／「21世紀への留学生政策」(『教育と医学』第32巻第9号、教育と医学の会)／「外国を理解すること」(『弘道』第932号、日本弘道会)／「放送大学—授業開始から15年、生涯学習の中核機関としての現状と期待—」(『レファレンス』国立国会図書館調査立法考査局)など、多数。

“21世紀創造型大学”

18歳人口の急減期を迎え、私立大学も含めた公教育機関は、教育・研究の充実を中心とした「大学改革」の取り組みを強めています。本学においても「近未来構想協議会」における全学的な協議の中で、1996年7月に21世紀ビジョンである「Fu 21（フューチャー・ユニバーシティ-21）」構想を発表し、21世紀創造型大学として社会の要請に応えられる大学改革の道筋を学内外に明らかにしました。

本学は、この間、21世紀ビジョンを一つ一つ確実に具体化させるべく、1998年4月には、より高度で専門的なスポーツ研究を目指して「大学院博士課程」を開設し、同年10月には競技スポーツの競技力向上、スポーツ振興、スポーツ文化の向上を目的とした「スポーツ局」を開設させました。

今回は、平成12年度をもって完成年度を迎え、博士が誕生した「大学院博士後期課程」を特集し、あわせて3年目に入った「スポーツ局」を紹介します。

より高度な研究の成果が、本学におけるスポーツ文化発信の源泉となり、この4月に就任した長谷川新学長のもと、21世紀にさらなる飛躍を目指します。

百年記念館





大学院博士後期課程の完成にあたって。

中野昭一
大学院体育科学研究科長

大学院博士後期課程

念願であった大学院体育科学研究科博士課程が1998年4月に開設されてから3年、博士後期課程の完成初年度にあたるこの3月に第一号の博士(体育科学)を4人も誕生させることができたことは、感慨無量なものであります。思い返せば、96年4月の「大学院博士課程設置推進特別委員会および同設置推進委員会」の発足に始まるこの5年間は、試行錯誤を繰り返しながらも、全大学を挙げての協力と支援があったからこそ、ここまで歩んでこれたのだと思います。

その歴史的な98年に博士後期課程に入学した1期生は、スポーツ文化・社会科学系4名、トレーニング科学系4名、健康科学・スポーツ医科学系2名の計10名でした。その内、今回、6名が満期退学(課程博士)し、あとの4名は本学研究科博士委員会に学位論文(博士請求論文)を提出し、所定の審査を受けて合格した博士(体育科学)の学位授与者です。4人の内訳は、スポーツ文化・社会科学系、トレーニング科学系が各1名、健康科学・スポーツ医科学系が2名です。これによって本学大学院は、名実ともに大学院としての形をなし、課程博士はもちろん論文博士の提出も可能となったわけです。

しかし、大学院博士後期課程が完成したとはいえ、まだ胸突き八丁を登ったところ、問題はこれからと決意を新たにしております。現在、博士後期課程の院生は99年度入学生8名、2000年度入学生6名、2001年度入学生7人と、定員を満たしてはいるものの、まだ他大学出身者や留学生も多く、今後、本大学院が大いに発展していくには、より多くの本学出身者の大学院進学が望まれるところです。本大学院としては、院生の過半数を本学の学部卒業生で占めてこそ日本体育大学の大学院であると考えており、さらに、本大学院の学位(修士、博士)を取得した本学出身者が、学部や大学院の教員として中枢を占め、本学の発展のために活躍されることを希望しております。

私どもの指導のもとに研究者が博士となり、その博士がまた次の博士を育てていく。そんな研究の伝統を本大学院が培っていくことが望まれています。そうした明日の課題を射程に入れながら、今後、本大学院および体育科学のさらなる発展のために、研究施設をさらに充実させるとともに、大学院・教職員全員が力を合わせて全力で努力してまいりたいと考えております。

大学院の学系



「スポーツ文化・社会科学系」

スポーツ文化・社会科学系の歩んだ3年

博士後期課程
スポーツ文化・社会科学系主任

◎
稲垣正浩



21世紀になったばかりの、この3月に、スポーツ文化・社会科学系から一人の博士が誕生した。大学院博士後期課程が設置されて3年、思い返せば感慨無量である。

この学系は、正木健雄教授（スポーツ教育学）、谷釜了正教授（日本スポーツ史）、そしてわたし（外国スポーツ史）の3人が専任として担当し、あとは非常勤講師に頼るという、きわめて変則的なスタートを切ることにした。というのは、スポーツ文化・社会科学系という専門領域の広さからして、専任教授がわずかに3人というのは、あまりに少なすぎるからである。しかし、幸いなことに、非常勤講師には日本の第2線で活躍しておられる第一人者の方々ばかりをお迎えすることができ、ホッと息。

そのお陰というか、院生には1期生4名、2期生4名、3期生3名の計11名を迎えることができた。その内訳は、外国人留学生が3名、社会人（大学教授）が1名、他大学の修士から4名、本学の修士から3名と、多士済々である。研究指導教員別にみれば、正木教授のところに1名、わたしのところに10名である。予想外に大勢の院生が集まり、お互いに刺激しあいながら、熱気のこもった研究が展開している。

主な研究テーマを挙げておくと、「中国現代スポーツ産業政策史」「モンゴル相撲」「日本の近代的身体形成過程」「子どもの身体」「競輪の歴史」「満族シャーマンの身体技法」「韓国シルムの近代化」「武と舞の同根性」「ピナ・バウシュの舞踊論」「メディアとスポーツ」など。まことにバラエティに富んでいる。

これだけの大勢の院生を研究者として「本立ちさせるのは、じつは、大変なことである。そこで、毎週水曜日午後4時30分から「サロン」と称する自主ゼミを開催し、研鑽にこれ努めている。参加者は自由。本学の院生を中心に、他大学の先生や院生、卒業生、出版社の編集者、家庭の主婦などが集まって、侃々諤々の議論を楽しんでいる。

また、院生の研究成果を発表する場として「IPHIGENEIA（スポーツ文化・社会科学系紀要）の第1号を刊行した。これから年に1回を目標に刊行していく予定。さらに、研究室の同人誌「GAIL」を手作りで発行。お互いの意志疎通をはかっている。

スポーツ文化・社会科学系の「これから」にご注目ください。

学位論文合格者の声

陸 小聰

[学位論文]◎「中国スポーツ産業政策の成立過程に関する研究」

日体大博士一期生としての誇りをもって。

今回の研究で一番苦労したのは、研究資料（史）料を収集し先行研究を検討した上で、いかなる思想をもって自分なりの研究スタンスに立つのか、そしていかにこの研究を通して中国スポーツの現代史研究に新しい地平を開いていくのか、という点でした。そこで、恩師の稲垣教授からの徹底したご指導を受け、ここ五十数年の中国スポーツの現代史を追跡しながら、今日における中国スポーツ文化変容の鍵となる、スポーツ産業政策の成立過程の解明を試みました。

日体大を選んだ理由は、中国で研究をしていた頃、文献の中で「日本体育大学」という名を目にし、スポーツでは当然日本一の大学だと思っていたからです。そして、それは正解でした。研究資料（史）料収集の際、日体大の図書館に中国スポーツ関係の文献が驚くほど沢山集まっており、わけでも、今では中国でも見当たらないほどの古いスポーツ関係の雑誌、1950年に初刊した『新体育』が全巻揃っていたのです。これは中国スポーツの現代史研究の第一次史料ですので、すごく助かりました。素晴らしい図書館に感謝です。

これからの進路は未定ですが、いずれにしてもいい研究や教育活動ができる環境に身を置き、日体大博士一期生としての誇りをもって、さらなる努力をしていきたいと思っています。

PROFILE

ろう・しょうそん●1960年生まれ。上海体育学院卒業の後、華東師範大学で教鞭をとり、2年後、同大学院マスターコースに入学。修了後、上海体育科学研究所の専任研究員として勤務しながら、上海市の卓球代表チームの助監督も兼任。91年青森県の山田高校との卓球交流試合のため来日、日本に強い親しみを感じる。92年本学の研究員として単身来日、同修士課程に入学。同課程修了後、3年間、本学の期限付助手を勤め、98年同後期課程に入学。現在に至る。学位論文に合格し、3月10日体育科学博士の学位記を授与される。



「トレーニング科学系」

トレーニング科学系の概要と3年間の歩み

博士後期課程
トレーニング科学系主任

◎
浅見俊雄



博士後期課程のトレーニング科学系は、「競技力向上のためのトレーニングやコーチングの科学的基礎的進展を目指す研究分野」を対象とする系として設立され、3年を経てここに1人の博士を誕生させることができた。この機会に、トレーニング科学系の内容とこの3年間の歩みを記しておきたい。

教員の構成はマル合として浅見俊雄、石井喜八、堀居昭の3名、他に授業担当教員が専任3名、非常勤1名である。また助手1名が教員の授業や院生の研究をサポートしている。授業科目としては、トレーニング学Ⅰ、Ⅱ、コーチング学、スポーツ栄養学、スポーツ・バイオメカニクス、スポーツ心理学Ⅰ、Ⅱのそれぞれの特論（講義）と演習（スポーツ心理学特論Ⅱには演習はない）の13科目が用意されている。

この3年間に入学した院生は、10年度4名、11、12年度各2名の計8名で、うち本学前期課程からの進学者が6名（うち学部も本学出身者は2名）、他大学の修士課程からの入学者が2名となっている。このうち社会人選抜と外国人選抜が各1名で、他は一般選抜である。性別では男性6、女性2である。シドニーで念願の金メダルを獲得した田村亮子も、12年度の入学者である。なおすでに決定した13年度の入学予定者は1名（女性）で、学部からの本学出身者で一般選抜での入学である。

1期の入学者は本年度3年の課程を修了し、うち岩原文彦が「無酸素性運動後の効果的なクーリングダウンについて」の学位論文を提出して、所定の審査、試験に合格し、3月10日に学長から博士（体育科学）の学位記が授与された。他の3名も満期退学となり、さらに研究を続けて近く論文がまとめられて提出されることが期待されている。

この他に研究生が4名在籍していて、うち2名はすでに3年間で在籍していることから、13年からは論文博士としての論文提出資格ができたので、近い将来論文博士が誕生することになるであろう。

ところでこの3年間は試行錯誤の繰り返しであったが、新しいものを作ろうという教員と院生の情熱がここまでの結果を生んできたといつてよいだろう。大学の支援もあつて実験設備も徐々に整ってきたのでこれからの一層の発展が期待されるであろう。

学位論文合格者の声

岩原文彦

〔学位論文〕◎「無酸素性運動後の効果的なクーリングダウンについて」

スポーツの現場に密着した研究がしたくて入学しました。

東大では基礎的な研究が主で、もっと現場に出て応用的な研究をしたかったので、それに適った大学院ということで入学しました。自分の思いでもあった「現場に密着して、現場にある問題を科学的に解決していく研究をしる」が口癖の浅見先生に出会い、また、研究設備において他大学よりも充実したものも多くあり、入学して良かったと思います。

学位論文は、競技と競技の間に同じ運動をするのが良いのか？ストレッチ程度で他に何もしない方が良いのか？それとも全く違う運動をした方が良いのか？といったことを実証的に研究したものです。水泳競技は1日に2～3回競技を行う種目ですが、学生時代に水泳選手をやっていた、その競技と競技の短い時間の間にどのような運動をすればより効果的か？といった問題意識から生まれたものです。選手は、科学的な根拠もなく、主観的に自分の感覚でやっていたところがあって、果たしてそれでいいのかという思いでした。

4月からは、浅見先生が長に就任される国立スポーツ科学センターの研究員になります。今後も現場に密着した研究をより深めていきたいと思っています。夢は、トップアスリートをサポートし、そのサポートした選手の中からオリンピックで金メダルを取れるような選手を出すことです。

PROFILE

いわはら・ふみひこ●1972年生まれ。国士舘大学卒業。東京大学教育学部で学部研究生として2年間学んだ後、96年本学大学院修士課程に入学、98年同後期課程に進学、現在に至る。学位論文に合格し、3月10日体育科学博士の学位記を授与される。



「健康科学・スポーツ医科学系」

ドクターコース完成までの経過と 将来への展望

博士後期課程
健康科学・スポーツ医科学系主任

◎
中嶋寛之



今春はじめて日本
体育大学大学院後期
課程の健康科学・ス
ポーツ医科学系より体
科学博士が誕生した。
人により大学院の
とらえ方には、多少の
違いはあるかもしれ
ないが、とくに後期課
程では、将来性のある
研究者の養成をはか
ることが目的で、スポーツの世界に置き換えれば、国際級せめて国内
トップレベルの競技選手を育成することにつながると思う。

したがって、条件としては、まず(1)研究内容の創造性、スポーツでい
えば独自の技と構成あるいは新記録を出すこと、(2)研究者としての
学力、すなわち選手としての素質と将来性、(3)研究論文の作成、い
うなれば記録や技が専門家の間で評価され認められることその他、
(4)学会における発表・質疑に対する適切な応答、すなわち公式競技
会への出場と良い成績をあげることなどが必須となる。

課程博士としておおよその尺度として、(2)は課程を経ることによ
り大方満たされるが、他の三条件はなかなか大変である。

まず、研究内容の創造性に関しては、本人のこれまでの経験や知
識に基づく知見やアイデアにもよるが、良い指導教官に恵まれ本人
の能力がうまく引き出されれば良い結果につながる。体操競技でい
えばウルトラCの開発などがこれに相当する。

つぎに、論文作成は規格にあったものが公の刊行物として一般に公
開される必要がある。つまり競技記録や新しい技は公式戦で認めら
れたものでないと幻のものとなってしまう。これは在学中に公認記録
を二つぐらいいは出すことに通じる。

また、公式戦に出場し、優秀な選手だと満場から喝采を受けるよ
うな良い試合をすることも必要である。

私は、前述のような基準でこの間、院生の指導にあたってきたつも
りである。この度の出来映えをみると、なかには3年間に英文をふ
くみ6篇の論文を刊行するなど、私が初期に考えていた以上の十分
な成果をあげ期待にこたえてくれたものもある。これには当事者の集
中力・継続力をふくめた努力にもよるが、バックアップしてくれた大
学をはじめ周囲の多大な協力によるところも大きい。このような状
況も全くスポーツの世界と同じである。Scientist Gameとも云われ
るゆえんである。

さて、とりあえず日本体育大学大学院の博士課程は完成したと
いつてもよからう。問題はこれからである。

将来への展望のつは、新しい人材をどのようにに大学が生かしてい
くかということである。もう一つは、レベルをどの程度で維持してい
かである。人材の生かし方によってわれわれの意気込みも違ってくる
し、入ってくる院生(選手)の期待感や資質・レベルも違ってくるのは、
これまたスポーツの世界と同様である。

学位論文合格者の声

谷代一哉 [学位論文] ◎「MRI-T2値を指標としたUphill runningとDownhill runningにおける
下肢骨格筋動員の検討について」

少しでも後輩のために役立てばと思った研究テーマです。

学部時代、陸上部で駅伝の選手でした。論文のテーマは学部時代から温めていたもので、「箱根駅伝」
には出てませんが、ポイントとなる山登り・山下りの克服に向けて、少しでも後輩のために役立てばとの思い
がモチーフになっています。

研究は、データの加工法で中嶋先生からアドバイスをいただきながら、測定を中心に行いました。そこでは、
新しく導入されたMRIが威力を発揮しました。今後の進路は未定ですが、このテーマをさらに深めながら、研
究者の道を歩んでいきたいと思っています。

津山 薫 [学位論文] ◎「スポーツ選手の頸部筋力に関する研究」
国際的にも未研究のテーマなのでヤリガイがありました。

やむなく英米文学科に進んだものの、一番興味を持ったスポーツへの思いを断ち切れず、4年間磨いた英
語力を生かしながらスポーツの研究をしようと思い日体大に入学しました。

論文は、中嶋先生から教えていただいた、「アメリカンフットボールやレスリングの選手は首のケガが多く、そ
の予防手段として首の筋力が必要だ」ということをヒントに、選手の筋力の実態調査／筋力強化に有効なト
レーニング法／筋力とケガの因果関係を調べ研究したものです。当面は非常勤講師ですが、国際的にも未
研究の分野であるこのテーマをさらに研究していきたいと思っています。

PROFILE

やしろ・かずや (写真左) ●1971年生まれ。日本体
育大学卒業。96年本学大学院修士課程に入学。
98年同後期課程に進学。現在に至る。学位論文
に合格し、3月10日体育科学博士の学位記を授
与される。

つやま・かおる (写真右) ●1968年生まれ。立正大
学文学部英米文学科卒業の後、93年本学大学
院修士課程に入学。修了後、本学で3年間の期
限付助手を経て、98年同後期課程に進学。現在
に至る。学位論文に合格し、3月10日体育科学博
士の学位記を授与される。



新たな陣容で、21世紀に大きく一歩踏み出す。

本学における既存のスポーツ活動である学友会運動部活動とは線を画し、戦略的な位置づけを与えながら1998年10月に開設された「スポーツ局」は、今、新たな陣容で、21世紀に大きく一歩踏み出そうとしている。

この間のスポーツ局の事業を、その大きな柱の一つである「競技スポーツ強化事業」を中心に概括して見よう。人的支援という側面では、1999年度は4名であったスポーツ専門職も2000年度には12名を数え、重点強化種目の強化に大きく貢献してきた。また1999年10月からは重点強化選手に対して財政的支援が開始され、2000年度からは重点強化種目に対する財政的支援についても全面的に実施された（駅伝種目に対しては1999年度から実施）。強化合宿の財政的サポートなど多方面に亘る支援が行われたことにより、既に

具体的な成果が現れている種目や選手も出てきている。特に、昨年開催されたシドニーオリンピックでの、重点強化A指定選手、田島肇選手（400m個人メドレー銀メダル）の活躍は記憶に新しいところである。また、スポーツ局が重点強化種目として位置づけてきた「駅伝種目」についてもシード権の獲得など具体的な成果としては現れていないが、確実にチーム力の底上げが行われてきた。スポーツ局のリクルーティング支援により、高い実績と大きな可能性を秘めた有力選手が集まりつつあることと合わせて、駅伝復活の地歩が一歩一歩築かれてきていると評価ができる。

そして、スポーツ局は21世紀に大きく一歩踏み出そうとしている。懸案事項であった、医・科学的サポートの充実を図るべく、2001年度からは専属トレーナーと栄養アドバイザーとの契約も予定されており、今後、重点強化種目・選手に対するきめ細かなサポートが行われることにより、設立当初のビジョンであった総合的強化システムが具体的な形として構築されようとしている。

以上概括したように、スポーツ局は、新たな陣容と強化のための体制を整えながら「競技スポーツ活動における重点強化種目、重点強化選手の競技力の向上を図り、その実践によって培った多くの経験を広く社会に還元することにより、スポーツの振興、スポーツ文化の向上に貢献する」（スポーツ局規程第2条）という大きな目的を達成するために、ひとつ高い壁を、今、超えようとしている。

【活動記録】

■1998年度

- 04月07日：第1回スポーツ局運営委員会
- 09月28日：第6回臨時教授会にて「スポーツ局規程」が承認される
- 10月09日：理事会にてスポーツ局開設が承認される
- 10月10日：日本体育大学スポーツ局開設
- 12月22日：「スポーツ局開設」共同記者会見を開催（目黒雅叙園にて）
- 12月22日：「日本体育大学スポーツ局開設記念のつどい」開催（目黒雅叙園にて）
- 01月15日：「箱根駅伝日体大復活広島会議」開催（広島市にて）
- 01月22日：「第1回日本体育大学の駅伝を強くする会」開催（広島市にて）
- 03月06日：「陸校会」全国役員との懇談会開催（高輪京急ホテルにて）

■1999年度

- 04月17日：シンポジウム「スポーツ医・科学サポートによる競技力向上」開催
- 06月：スポーツ局スポーツ専門職3名採用（駅伝種目、レスリング種目、競泳女子種目）
- 08月：スポーツ局スポーツ専門職1名採用（体操競技女子種目）
- 12月16日：1999年度重点強化選手認定書授与式
- 12月20日：「箱根駅伝日体大復活広島報告会」開催（広島市にて）
- 01月21日：「第2回日本体育大学の駅伝を強くする会」開催（広島市にて）
- 03月30日：シンポジウム「箱根駅伝」開催

■2000年度

- 04月：1999年度契約4名に加えて、スポーツ専門職6名採用（サッカー種目2名、バスケットボール女子種目、バスケットボール男子種目、バレーボール女子種目、医・科学サポートスタッフ）
- 05月：スポーツ局スポーツ専門職1名採用（野球種目）
- 06月28日：「日本体育大学シドニー・オリンピック壮行会」開催（東京全日空ホテルにて）
- 08月：スポーツ局スポーツ専門職1名採用（野球種目）
- 10月23日：「日本体育大学シドニー・オリンピック報告会」開催（キャピトル東急ホテルにて）
- 01月19日：「第3回日本体育大学の駅伝を強くする会」開催（広島市にて）

2001年度重点強化種目

- 駅伝種目(男)【1999年度～】
- 体操競技種目(男・女)【1999年度～】
- レスリング種目(男)【1999年度～】
- バスケットボール種目(男・女)【1999年度～】
- サッカー種目(男)【2000年度～】
- ラグビー種目(男)【2000年度～】
- バレーボール種目(男・女)【2000年度～】
- 競泳種目(女)【2000年度～】
- 硬式野球種目【2000年度～】

2001年度重点強化選手

- A指定選手
オリンピック大会又は世界選手権大会において、入賞が期待できる選手並びにスポーツ局長が特に必要があると認めた選手
- B指定選手
1:オリンピック大会又は世界選手権大会に、出場が期待できる選手
2:ユニバーシアード大会又は日本選手権大会において、入賞が期待できる選手
3:大学選手権大会において、優勝又はチームの優勝に貢献が期待できる選手並びにスポーツ局長が特に必要があると認めた選手
- C指定選手
1:オリンピック大会又は世界選手権大会に、出場の可能性がある選手
2:ユニバーシアード大会又は日本選手権大会において、入賞の可能性のある選手
3:大学選手権大会において、優勝又はチームの優勝に貢献の可能性のある選手並びにスポーツ局長が特に必要があると認めた選手
- * 1999年度重点強化選手:A指定-1名 B指定-5名 C指定-6名
- * 2000年度重点強化選手:A指定-1名 B指定-2名 C指定-15名
- * 2001年度重点強化選手については、現在選考中

重点強化種目

重点強化選手

強化スタッフ(スポーツ専門職)

大学

法人

スポーツ局

スポーツ局運営委員会

スポーツ局
アドバイザーボード

競技スポーツ強化事業

- 財政的支援
- 人的支援
- スポーツ医・科学的支援
- スポーツ環境整備支援
- リクルーティング支援

広報事業

スポーツ振興事業

2001年度新規スポーツ専門職

栄養アドバイザー



安達 瑞保【あだちみずほ】(25歳)

- 経歴
98年3月 共立女子大学卒業
01年3月 同大学院修了
01年4月 日本体育大学スポーツ局医・科学サポートスタッフ
- 業績
98年7月 東京都健康づくり推進センター栄養士
- 2001年度の抱負
1: 重点強化種目・選手の食生活実態調査による実状の把握
2: 種別別講義及び栄養アドバイザーに対する要望の確認
3: 献立の調整
4: 個別カウンセリング

トレーナー



河野 徳良【こののとくよし】(34歳)

- 経歴
88年3月 日本体育大学卒業
91年3月 日本鍼灸理療専門学校卒業
99年8月 米国インディアナ州立大学アスレチックトレーニング修士課程修了
- 業績
88年4月 (株)メジャー・トレーナーズ
99年4月 日本体育大学期限付助手
01年4月 同スポーツ局トレーナー
- 業績
89年1月 東京ガス硬式野球部トレーナー
91年4月 (株)メジャー・トレーナーズチーフトレーナー
96年5月 インディアナ州立大学学生ヘッドトレーナー
98年4月 日本体育大学野球部コンディショニングコーチ
98年4月 JBATSディレクター
00年4月 日本バドミントン協会選手強化本部トレーナー班チーフトレーナー
00年9月 オリンピック・シドニー大会全日本野球チームチーフトレーナー
- 2001年度の抱負
1: 重点強化種目とのヒヤリング
2: 重点強化種目へのコンディショニングサービス
3: コンディショニングルームの設立準備
4: 学生トレーナー教育

コーチ専門職



松本 岳士【まつもとたけし】(31歳)

- 経歴
バレーボール(男)種目
92年3月 日本体育大学卒業
92年4月 東レ(株)
01年4月 日本体育大学スポーツ局コーチ専門職
- 競技歴
92年8月～ 第6回ビーチバレージャパン優勝
92年12月～ 第26回日本リーグ3位
93年7月 ユニバーシアード・バレーボール大会優勝
98年12月～ 第6回Vリーグ準優勝
00年1月～ 第7回Vリーグ準優勝
- 指導歴
99年4月～ 東レバレー部選手兼任コーチ
99年6月・7月 日本体育大学バレーボール部(男)監督代行
00年4月～ 東レバレー部専任コーチ
- 2001年度の抱負
1: 春季・秋季リーグ戦Aクラス
2: 東日本学生選手権大会ベスト4
3: 全日本学生選手権大会ベスト4



長谷 孝治【はせこうじ】(30歳)

- 経歴
駅伝(男)種目
93年3月 日本体育大学卒業
94年12月 オレゴン大学附属語学学校修了
97年4月 世田谷区立深沢中学校専任教諭
00年4月 東京都立羽田高等学校専任教諭
01年4月 日本体育大学スポーツ局コーチ専門職
- 競技歴
88年 800m全国14位、東京1位、1500m東京2位
- 指導歴
93年 東京都高体連中・長距離ブロック強化コーチ
97年 東京都高体連中・長距離ブロック強化コーチ
97年 西村美樹選手専任コーチ(2000年度800m全国1位)
- 2001年度の抱負
1: 箱根駅伝への出場及びシード権の獲得

※その他の新規契約予定者及び継続契約予定者は、割愛させていただきます。

ジュニア世界大会に出場し、 春のリーグ戦に優勝したい。

バレーボール部

日体大は春季・秋季のリーグ戦やインカレでの優勝から遠ざかって久しい。
しかし、今季のバレー部は好素材がそろい、優勝も展望できそうである。
その好素材の核で、全日本の卵でもあるジュニア候補選手の日高智礼・三溝克幸の両君に
バレーへの思いを中心に聞いた。



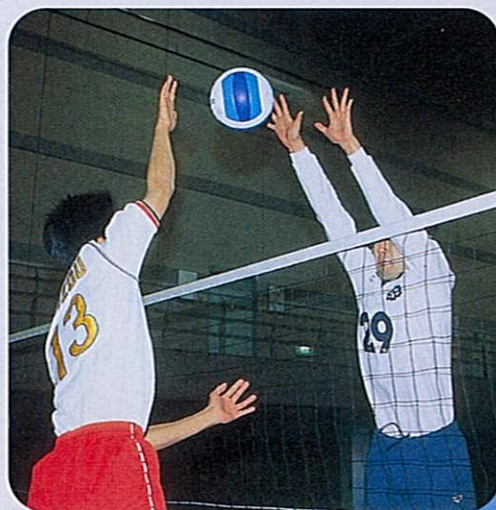
日高智礼

(体育学科1年)

&

三溝克幸

(体育学科1年)



「バレーをやるようになったキッカケと日体大に進学した理由を教えてください。」
日高●ソフトボールが盛んな中学でしたが、兄がバレーをやっていたので、自分も背が高かったため自然と中学二年からバレー部に入りました。日体大に進学したのは、中学時代の監督が森田先生の知り合いで、高校の監督も日体大OBということからです。
三溝●自分も中学一年からバレーを始めましたが、キッカケは父親がバレーをやっていたからです。進学の理由は、父親が日体大のバレー部OBだったからです。
「海外遠征の経験と外国チームと闘った印象はどうですか？」
日高●ユース代表で高校2年からアジア大会、世界大会に出場しますが、世界のレベルの高さを痛感しました。
三溝●高校時代は、台湾と親善試合をやったのが唯一の経験で僕はユースや世界大会の経験はありません。しかし、この間の海外遠征で対戦した上海ジュニアは強く、みんな背が高くても手も長い。世界のレベルの高さを見る思いでした。
「自分のプレイの長所と目標にするあのこれのプレイヤーを聞かせて下さい。」
三溝●サーブには自信があります。この間の上海遠征での練習試合ではピンチサーブの場面で出してもらい、数少ないサーブポイントを出せたので嬉しかったです。目標とする選手は、富士フィルムのレフトで

PROFILE

ひだか・ともひろ●1981年、宮崎県生まれ。
熊本県私立鎮西高校出身。高校2年の時、ユース代表に選ばれアジアジュニア大会に出場。高校3年の時、国体3位、ジュニア世界大会に出場。全日本男子B(ジュニア)の候補選手として、強化合宿や海外遠征に参加。ポジションはセンター。
最高到達点3m40cm。身長2m、体重95kg

さみぞ・かつゆき●1981年、長野県生まれ。
長野県立岡谷工業高校出身。高校2年の時、全国高校大会で優勝。高校3年の時、インターハイでベスト8、国体3位。全日本男子B(ジュニア)の候補選手として、強化合宿や海外遠征に参加。ポジションはサイドアタッカー。
最高到達点3m33cm。身長189cm、体重68kg

エースの青山さん。190cmもないのにサーブレシーブが良く、小技もうまいところに憧れます。自分もそうなりたいです。
日高●長所はブロックの良さだと思います。高校の先輩でもある、全日本でセンターをやっている朝日健太郎さん。その人を目指しています。
「7年間続けてきたが、自分にとってバレーの魅力はどこにありますか？」
日高●バレーは一人で技を競うスポーツではなく6人で共に闘う競技なので、勝利の喜びを共にできる。高校時代、九州大会で優勝した時の瞬間は今でも忘れられません。
三溝●中学時代は、大会に出ても二回戦も勝てなくて悔しい思いをしました。だから、強い高校に入りたいと、岡谷工業に入学したのです。そのお陰で優勝というものを初体験でき、勝つ喜びを知りました。その喜びが原動力になっていると思います。
「今後の目標や夢を聞かせて下さい。」
日高●ジュニアにおいては世界大会に出場すること。大学では、優勝から遠ざかっているのが今度の春季リーグ戦で優勝することです。
三溝●ジュニア候補者15人の中から12人に絞られるので、ぜひその中に残って世界選手権に出場したいと思っています。あと、日高と同じ思いで、春季リーグ戦で優勝することです。

誰も果たしたことの無い インカレ3連覇の偉業を達成したい。

話題に上ることは少ないが、ソフトテニスの世界で、誰も果たしたことの無いインカレ三連覇の偉業を達成しようとしているペアがいる。ナショナルチームの選手でもある坂下真知子さん・濱中洋美さんである。二人にソフトテニスについていろいろ聞いた。



坂下真知子

(体育学科3年)

&

濱中洋美

(体育学科1年)



— 濱中さんが前衛、坂下さんが後衛のペアを組んで一年になりますが、互いのプレイスタイルや性格をどう見てますか？
坂下●先に攻めるスタイルを二人のモットーにしてますが、この子は、追い込まれても自分のプレイを辛抱強く続けられる粘り強さがあります。それと、組んでいく中で培っていくものですが、ペア感と読みがいいですね。
濱中●坂下さんは、シュートのボールを、とにかく打って打って打ち返し、それで相手が参ったところで決める、というスタイルですね。我慢強く、私にミスが出たり参ったときでも、「それがどうした？」という感じで言ってくれるので心強いです。

— ソフトテニスをするようになったキッカケと日体大に進学した理由を教えてください。
濱中●始めたのは小学校三年生の時から。たまたま自宅近くにスポーツ少年団のソフトテニスチームがあって、募集をしていたので、友達と一緒に入ったのです。日体大に進学したのは、教員にならなかったのとソフトテニスの強い大学だったからです。
坂下●コートもある小学校で三年生の時から部活で始めました。キッカケはやっていて二人の姉に連れられて行くうちに自然とやるようになりしました。進学の理由は、日体大がソフトテニスの強豪校だったことと教員志望だったからです。



— 今後の目標や夢を聞かせて下さい。
坂下●5月に大阪で開催される東アジア競技大会(四大世界大会の二)に出場すること、8月のインカレで、まだ誰も成し遂げたことの無い三連覇を達成することです。
濱中●私も同じで、インカレで三連覇することです。そして、5月の大会はナショナルチーム13人の中から5人しか選ばれないので私は無理だと思いますが、在学中に世界大会のどれかに出場することを目標にしています。

— 二人それぞれの課題は？
坂下●得意のストロークをさらに磨くこと。そして、精神面ではプレッシャーに弱いところがあるので、克服していくことです。
濱中●入学してきて、高校時代やってきたテニスと大学・実業団のテニスでは質が違うことが身にしました。その中で勝っていくにはどうすればいいかを考え、対応できるようにワンランク上を目指したいです。

— 小学校から続けてきてますが、ソフトテニスの面白さ・魅力はどこにありますか？
濱中●知れば知るほど面白く、奥が深いと思います。坂下●グラウンドコンディションによってボールの弾みかたも違うし、クレーコートや冬のインドアにも対応しなければならず、奥は深いんです。自分ではクレーが得意なつもりなのに、面白いことにインドアでの試合の方が勝っているんです。

PROFILE

さかし・まここ●1979年、鹿児島県生まれ。
福岡県私立中村学園女子高等学校出身。ソフトテニス部主将。ナショナルチーム選手。小学校の時、全国大会に出場し優勝。高校3年の時、インターハイ優勝、国体優勝。
後衛。身長164cm

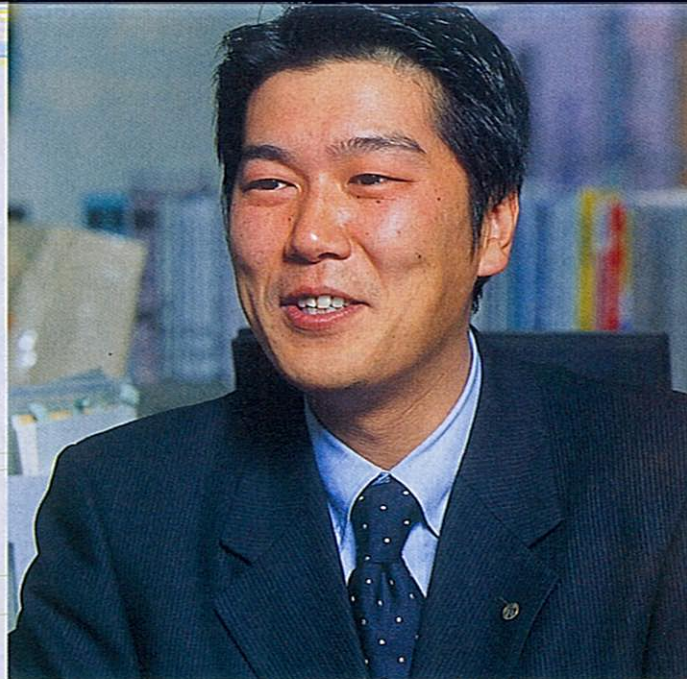
はまなか・ひろみ●1982年、広島県生まれ。
私立広島女子商業(現広島安芸女子大学)高等学校出身。ナショナルチーム選手。高校3年の時、インターハイ優勝、国体優勝。
前衛。身長154cm

國元 裕秀さん

株式会社 日本旅行

東京教育旅行支店営業一課・國元グループ
セールスリーダー

[1992年3月社会体育学科卒業]



見知らぬ国の文化や歴史的遺産をこの目で見て、
さまざまな人と触れあえる旅行業の魅力は尽きない。

日体大に入学してくる人のほとんどは、トップアスリートや教員、スポーツの指導員のいずれかを目標として入ってくる。しかし、國元さんは、そうした入学動機とは異色で、旅行業界への入社を夢見て入学してきた学生だった。「子どもの頃からスポーツはもちろん、乗り物と旅行も好きでした。で、中学2年の修学旅行の時、ある旅行会社の添乗員の方にその仕事の面白さ、すばらしさを聞いたのがきっかけで、憧れの職業になったんです」。

なら何故、日体大に?「本当は、商学部や経営学部に行きたかったんですが、中途半端な気持ちで文系の大学に進むのは嫌で、好きな体育教員の道もある日体大に進む方がいいと思ったのです。それと、これからの時代は日体大生は企業から求められるというイメージが自分の中にあったからです」。

だから就職活動は、「落ちたら浪人する」覚悟で旅行会社一本に絞り、日本旅行と数社を狙った。が、現実のハードルは高く、就職活動もままならなかった。「それゆえ、逆によけい燃えましたね。何とか試験だけでも受けさせて欲しいと、あらゆる方法を使いました」。そうした熱意が実って受験することができ、「不思議なことに」2社から採用通知がきた。まさに、中学2年の頃から追い求めた夢が実現したのである。

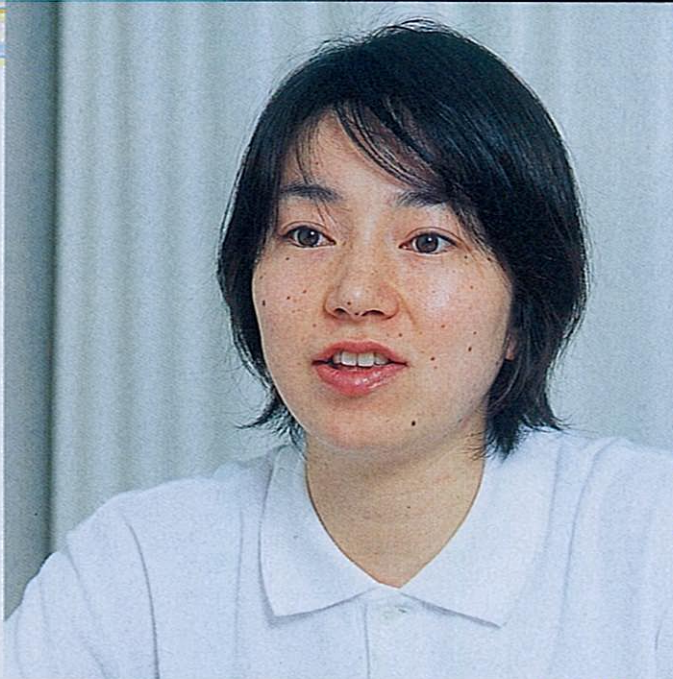
入社して9年、國元さんは現在、東京教育旅行支店営業一課のセールスリーダーのポジションにいる。この支店は、中学校から大学まで東京23区の公・私立の学校全てを営業対象にしており、中学・高校の修学旅行がメインだが、ホームステイ、語学研修、合宿、先生方の旅行など、学校で行う旅行は全て取り扱うという。入社当初、企業・法人・官公庁などを対象に国内外の旅行全てを取り扱う総合店舗を希望したが、学校だけを扱うこの支店に配属され、かなり不本意だったらしい。「それはそうでしょう。当時、中学・高校生の修学旅行先は京都や奈良ばかり。海外に行く機会なんてなかったんですから」。もっとも、最近は逆に、修学旅行も、中国、韓国、オーストラリアなど、海外が増えてきたという。「教育旅行支店の方が、あちこちに行ける確立が高くなってきましたね。お陰様で、添乗員として20数カ国行かせてもらいました」。しかし、この仕事の魅力は、海外旅行にだけあるわけではないらしい。「この仕事の特徴は人と人の触れあいの多さにありますが、営業的には、お客様が物ではなく、いわば自分という人間を買ってくれるところに充実感を覚えます。また添乗員としては、見知らぬ国の歴史的遺産を見たり、異文化に接し異国の人の考え方を知ることができ、面白い。いずれにしても魅力が尽きない仕事です」。

ところで、「実演会の委員を3年間もするなど、充実していて最高の4年間だった」と語る國元さんは、教員志望ではないのに、教員を目指す者が多い研修部に所属していた。そんな國元さんが、「仕事柄、学校の先生と接する機会が多いのですが、教員の世界に限らず、幅広く就職活動をした方がその経験は役立つはず。教育実習が今の僕に役立っているように」と、最後に語ってくれたメッセージは示唆に富んでいる。

(9月9日、株式会社 日本旅行東京教育旅行支店にて取材)



アクティブなOB・OG紹介



後藤 真理子さん

株式会社 ピープル

ピープルエグザス下総中山店

品質統括サブマネージャー

[1995年3月体育学科卒業]

サブマネージャーの仕事は大変ですが、オープンしたばかりのスポーツクラブなので、ヤリガイがあります。

年々、体育教員への道は厳しくなってきたり、スポーツ施設の指導員を目指す人が増えてきている。その背景にはやはり、教員が難しいのであれば“スポーツを通して自分の能力を発揮したい”という、日体大に入学してきた者ならばの願いがあるからに違いない。

後藤さんは、そうしたスポーツ施設の一つ(株)ピープルに勤務する、入社7年目を迎える中堅社員である。ピープルには、過去、約50名の日体大生が就職しており、今年も数名が入社するほど日体大生に人気の高い企業である。そのピープルエグザス下総中山店で、彼女は品質統括サブマネージャーの役職に就いている。ここは昨年12月にオープンしたばかりの店で、彼女は入社時から6年近く勤めた北浦和店から実家を離れ単身で転勤してきて、オープニングスタッフとして立ち上げから関わっている。ここで彼女は、支配人、マネージャーの下、スタッフの管理、育成教育から施設の快適環境づくり、プログラムの作成、水泳の指導などにキビキビとあたっている。管理業務から現場での指導業務まで大変な仕事だが、「ある程度仕事を任せてもらっているの、その分ヤリガイがありますよ」と明るく笑って言う。

しかし、そんな後藤さんも、本当は水泳が好きではなく、スポーツクラブの指導員になるつもりはなかったらしい。「中学の体育教員になって、走りの完成していない中学生に陸上の基礎を教えるのが夢だったんです。だから、採用された時でさえ、一年間やってみて、もしこの仕事が自分に合わなかったら、そして夢がまだ捨てきれなかったら、再度教員にチャレンジしようと思っていたほどなんです」。それほどまでにこだわる陸上への思いとは、何だったのだろうか？

後藤さんは、中学時代から注目されていた100mの短距離選手で、全国の中学生ランキングトップの記録保持者だった。しかし、ケガに見舞われて大きな大会では活躍できず、それでもその実績から陸上の強豪校埼玉栄高校に入学した。高校では、1年の時からインターハイ、国体に出場し、2年の時に出場したインターハイのリレーでは日本新記録で優勝している。いわば、競技者として絶頂期にあったといえる。しかし、好事魔多し。3年の時、走りすぎから足の甲を疲労骨折してしまう。それでも、その実績もあり推薦で日体大に入学した。大学ではインカレにも出場し、引退する4年の秋まで走り続けたが、その時の傷が癒えず、良い結果が出なかった。注目され続けてきただけに、不本意な4年間だったに違いない。「確かに、競技生活は不本意でした。でも、充実した4年間だったと思います。順調にきた人生が大学で挫折し悔しさを味わいましたが、その経験が今の仕事に生きていると思います。初め、水泳の担当は好きでなく、辛かったのですが、踏ん張るなかでヤリガイが見え、仕事に楽しさを覚えるようにもなりましたから」。そんな地獄を見たアスリートだからこそ、「学生時代は競技一本槍にならず、他のスポーツや健康のことにしてもっと学んでほしい。それは社会に出てから必ず、役立ちますから」というメッセージには、温かくも切実な思いがこもっていた。



(3月8日ピープルエグザス下総中山店にて取材)

今、輝いている

介護等体験特例法に基づく「介護等体験」について

教職教育実施委員会報告

(2001.3.9)

平成10年に施行された、いわゆる介護等体験特例法(小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許状法の特例等に関する法律)に基づいた「介護等体験」を本学もすでに3年間実施してきましたので、その取り組みや今後の課題について、担当している教職教育実施委員会(委員長:山田良樹教授)よりご報告いたします。

同法は、義務教育教員免許状を取得しようとするものは、特殊教育諸学校(盲・ろう・養護学校)で2日間、社会福祉施設(老人・障害者・児童福祉施設)で5日間の介護等の体験が義務付けられているもので、本学では施行初年度の平成10年度には短大体育科1年生のみを対象に実施し、平成11年度には1,200名余りの学部学生が体験を実施しました。ところが施行2年目ということもあり、大学側も、そして学生を受け入れる学校や施設側も十分な準備ができていたとは言えず、様々な問題点が浮き彫りになりました。特に参加する学生に対する事前の指導が十分とはいえず、学生の介護等体験に対する基本的な意識や現場における言動で様々な問題の指摘を受け、翌12年度には事前の指導に十分な体制を整える意味からも、学部2年次の体験は健康学科と社会体育学科にのみ実施し、体育学科と武道学科は3年次に実施することとしました。

《年度別介護等体験終了学生数及び予定数》

年 度	学 科(対象学年)	特殊諸学校	社会福祉施設
10年度	短大: 体育科(1年)	100名	104名
11年度	学部: 体育学科(2年)	834名	810名
	健康学科(2年)	169名	169名
	武道学科(2年)	105名	104名
	社会体育学科(2年)	135名	130名
	短大: 体育科(1年)	101名	97名
12年度	学部: 健康学科(2年)	170名	168名
	社会体育学科(2年)	136名	133名
	短大: 体育科(1年)	109名	105名
13年度	学部: 体育学科(3年)	申し込み数 713名	
	武道学科(3年)	申し込み数 91名	
	健康学科(2年)	未 定	
	社会体育学科(2年)	未 定	
	短大: 体育科(1年)	未 定	

平成13年度の介護等体験対象学生に対する事前指導は、下記のように4回の講習会に分けて行われ、この他に体験直前と事後には各クラス担任等による指導なども含めて実施され、すでに体育学科と武道学科3年生に対する事前指導の講習会は始まっています。

体験を実施する各種施設に対する理解を学生が少しでも深めた上で参加できるようにと、事前講習会には盲・ろう・養護それぞれの学校から現役教員と社会福祉施設職員においていただき、それぞれの現場の様子や体験中の諸注意までも含めてお話しいただくなど工夫をしています。

近年は、介護等経験に限らず教員免許状を取得するには必須である「教育実習」においても教職に就くことを強く望まないにもかかわらず、単に教員免許状を得たいがための体験や実習への参加などがもたらす様々な問題が指摘されています。こうした問題を少しでも減らすために、教職に対する学生の意識付けを明確にし、受け入れていただいている各種学校や福祉施設にとって日体大の学生こそ教員になって欲しいという評価をいただけるようにしっかりと事前事後の指導をしていくことが必要であり、すべての教職員の協力と理解の上で今後とも介護等体験を実施していきたいと思っております。

第1回講習会(介護等体験全体の概要理解)

1時限目	9:15~10:45	介護等体験の概要
2時限目	11:00~12:30	社会福祉施設における介護等体験の概要
3時限目	13:30~15:00	盲・ろう・養護学校における介護等体験の概要

第2回講習会(クラス担任による指導)

1時限目	16:15~18:00	介護等体験に係るビデオ鑑賞及び感想文の作成
------	-------------	-----------------------

第3回講習会(社会福祉施設関係)

1時限目	9:15~10:00	身体障害者関連施設における介護等体験
2時限目	10:15~11:00	知的障害者関連施設における介護等体験
3時限目	11:15~12:00	老人福祉施設における介護等体験
4時限目	12:00~12:30	感想文の作成

第4回講習会(盲・ろう・養護学校関係)

1時限目	9:15~10:00	盲学校における介護等体験
2時限目	10:15~11:00	ろう学校における介護等体験
3時限目	11:15~12:00	養護学校における介護等体験
4時限目	12:00~12:30	感想文の作成

戦後、日本のスポーツを支えてきたものは、高校・大学の運動部による学校スポーツと、「企業スポーツ」だと言われている。その企業スポーツが不況の影響から休廃部する企業が相次ぎ、日本の団体スポーツは崩壊の危機にある。一方、地域との密着や住民主導型クラブの必要性が叫ばれ、Jリーグ「百年構想」に基づいた総合スポーツクラブを目指す鹿島アントラーズや、地域との共生を目指す大学による総合型クラブの設立などの動きも出てきている。日本のスポーツは転換期にあるともいわれる現在、新聞各紙の報道や「スポーツ振興基本計画」に携わった浅見俊雄・元本学教授への取材を通して、企業スポーツの現状と地域スポーツの役割を探ってみた。

■企業スポーツの現状と撤退の背景

女子バレーの名門・日立の廃部に象徴されるように、不況の波にさらわれて、団体競技の企業スポーツが相次ぎ撤退している。朝日新聞社の調べでは「一九九一年からの企業スポーツの撤退は、トップレベルに限定しても百七十七チームにのぼることがわかった。内訳は社会人野球が最も多く五十四チーム、バレー、バスケットといった代表的球技でもそれぞれ二十のチームが身を引いた」（平成12年8月7日付朝日新聞朝刊）となっている。

その調査によると、企業スポーツからの撤退理由の約80%は業績不振とリストラなど経済的事情となっており、不況の深刻な影響をまともに受けていることがわかる。しかし一方で、景気が回復しても約60%の企業がチームを再開しない、とも答えている。時代や社会の変化の中で、企業におけるスポーツの位置づけが確実に変化しつつあるからだ。

かつて企業スポーツは、社員の健康増進や愛社精神の高揚に役立ち、企業のPR手段としても大きな役割を果たしてきた。しかし、「ライフスタイルの変化、レジャーの多様化などで『身内』の支持が減少し、同時にスポーツのプロ化、国際化に伴いアマチュア中心の企業スポーツのメディア価値が低下した」（平成12年11月28日付毎日新聞朝刊）。また、「経営が赤字なのに部を持つ説明責任を株主代表訴訟や外国人投資家に対し説明しにくい」（浅見教授）という面もある。そうした背景から、企業は撤退し再開をためらっている。

しかし、五輪選手などトップ選手の大半を企業選手が占めるように（アトランタ五輪では日本選手の54%）、依然として国際的な競技力は企業選手に支えられている。そのため、こうした状態が続くなら国内リーグのレベルや存続が危機的になるだけでなく、ナショナルチームの競技力が落ち、ひいては「日本のスポーツ自体が衰退してしまう」（本年2月28日読売朝刊）ことが懸念されている。

[企業スポーツと地域共生型の今後]

News Eye

■企業スポーツの新しい動き

危機的な状況の中でも、企業スポーツの新しいあるべき姿、進むべき道が模索されつつある。

読売新聞（本年2月28日朝刊）によれば、野村総研は「企業経営と企業スポーツのあり方」に関する調査研究を行い、企業がスポーツ支援を行う理念として、スポーツ振興を企業の社会貢献としてとらえる「社会貢献型」と地域密着に重点を置く「地域共生型」が将来的に重要なと位置づけている。また、官庁も企業スポーツの危機に対応するため、通産相は新しい理念のもとでのスポーツ活動を探るべく「企業スポーツ懇談会」を設置、文部省は企業スポーツに関する調査研究を実施するなど、対策に乗り出した。

そうした中で、新しく地域密着型を目指すはじめた新日本製鉄のような企業もある。「バレー部を切り離し、新会社を設立して地域クラブにし、野球、ラグビー、柔道も同様の形態にする方針」（平成12年11月28日付毎日新聞朝刊）という。日経新聞は「日本のアマチュアスポーツは企業がチームを所有するケースが多く、業績悪化に伴って廃部や休部に追い込まれてきた。新日鉄は景気に左右されずにスポーツ活動を支援し、存続させることができる運営形態を目指す」（11月27日付日経新聞朝刊）とコメントしている。

■「地域共生型」スポーツと企業スポーツの今後

社会と時代は、地域住民の誰もが自由に参加し、親しみ、楽しめるスポーツを求めている。文部省は、日本初のスポーツ施策といわれる「スポーツ振興基本計画」（詳細は本誌前号を参照）の中で、地域住民が主体的に運用する「総合型地域スポーツクラブ」と「広域スポーツセンター」の全国展開をうたっている。そこには、少子化や指導教師の高齢化、および生徒の運動離れ等による伝統的な学校スポーツの形骸化があり、地域社会との共生の中に再生を求めていかざるをえない背景がある。しかし、浅見教授は、学校施設を地域の中に開放し、「単線化から複線化への仕組みをつくっていく方が本来の学校スポーツの役割を果たせるだろう」と語っている。

「ドイツやスペインのサッカーの有名クラブチームは、バスケットボールやラグビーのチームを抱え、会員らは各競技や体力づくりに自由に参加できる」（本年2月8日付朝日新聞朝刊）という。早稲田大学人間科学部は、所沢市と提携して地域スポーツの拠点を目標として総合型スポーツクラブを設立した。Jリーグの鹿島アントラーズも、「地域密着」というJリーグの理念に沿って総合型スポーツクラブを目指すという。

時代と社会のキーワードは、「地域密着型」である。企業スポーツは今後、そのあり方を「所有から支援へ」と抜本的に転換し、社会貢献と地域との密着を図っていくかなければならないだろう。スポーツジャーナリストの二宮清純さんも、「企業はチームを所有するという考え方を捨て、行政と地域住民と三位一体になり、社会人スポーツ全体を支援する立場へと発想を切り替えるべきだ。地域密着型を強めてほしい」（平成12年5月29日付朝日新聞夕刊）と提案している。

下半期エッセイ

日体大生が人命救助に貢献!

昨年11月8日、武道学科3年の工田(たくみ)耕平君(柔道部所属)が、「人暮らしの老人が倒れているのを助け、人命救助に貢献した」として玉川消防署長から表彰されました。

10月29日の深夜0時30分頃、自宅近くろいでいた工田君は、同じアパートに住むおばさんの助けを呼ぶかすかな声に気づき、素早く2階から1階のその部屋に駆けつけたところ、心臓に持病を持つ82歳のおばさんが苦しんでいるのを発見。すぐに二九番に連絡を

取り、救急車到着までの間、介護しながらおばさんを励まし続け、病院到着後も集中治療室に入っているおばさんを朝4時まで傍らで付き添ったといいます。表彰された工田君は、「あの時、かすかな声に気づいていなかったらおばちゃんの命はどうなっていたのか。本当に助かって良かったです。あの時は、自分ができることを夢中でしただけです」と謙虚に語っているが、緊急時にすばやく冷静に対処できたその行動力は表彰に値します。



表彰を受ける工田君(右は塔尾学長、左は滝沢学部長)

「2000日体フェスティバル」開催

2000年11月1日から3日まで、横浜・健志台キャンパスにおいて「2000日体フェスティバル」が開催されました。テーマは「和」。20世紀最後の年に、新世紀への実行委員からのメッセージとして掲げられました。

晩秋の穏やかな晴天の下でオープニングを迎えたかったのですが、あいにくの雨となっていました。しかし、そこは日体生! 屋外のプログラムは可能な限り体育館等で行い、学生たちのいきいきとした躍動感あふれる場となりました。大運動会では、普段は勝つことを宿命とされた競技者として真剣に戦っていますが、今日だけは友達と和気藹々、歓声の嵐の中、笑顔の絶えることのない楽しいひとときを過ごしていました。

最終日には、青空も出て大勢の方に参加いただきました。特に人気を呼んだのは、やはりB・D・A・S・Hの熱いコンサート、デーブ大久保さんの汗を掻きながらの熱いプロ野球の楽しい裏話、スポーツジャーナリストとして活躍している二宮清純さんの豊富なお話でした。勿論、伝統のオールスター日体では日体パワーが炸裂していました。

「日体フェスティバル」は、学生実行委員がそのほとんどを企画・運営し、近隣のみならずにも数多く参加いただいております。近年では東京・世田谷キャンパスと、毎年開催地を移して例年11月に実施されています。秋には素顔の日体生がみなさまの心からお待ちしております。



「平成12年度卒業式」「平成12年度大学院学位記授与式」実施

平成13年3月10日、東京・世田谷キャンパスにおいて「平成12年度卒業式」、「平成12年度大学院学位記授与式」が行われ、大学体育学部1376名、専攻科6名、短大179名、大学院博士前期課程30名、そして本学初の博士後期課程で博士の学位記を授与された4名が、好天の青空に巣立って行きました。

式典の後には、例年同様に各クラブ・サークルの卒業生を祝う催しがキャンパス内で繰り広げられ、笑顔・涙……歓声の大きさはそのまま卒業生と後輩との絆の強さを象徴していました。

今後は、社会人となる者、更なる勉学の場を求めて専攻科・大学院へ進学する者、学部へ編入する者等々進道は違っても今日の感動を共に味わった者同士、日体大卒業生として胸を張ってがんばっていただきたいと思っています。



[平成13年度入試データ] 2001.3.22現在/入試広報室

■大学／体育学部

区 分		志願者数	受験者数	合格者数	入学予定者数	*倍率
体 育 学 科	推薦	482 (122)	482 (122)	414 (111)	412 (111)	1.2
	一般	1,974 (424)	1,946 (418)	698 (140)	469 (84)	2.8
健 康 学 科	推薦	43 (35)	43 (35)	36 (30)	36 (30)	1.2
	一般	457 (186)	451 (183)	188 (61)	139 (54)	2.4
武 道 学 科	推薦	56 (14)	56 (14)	50 (14)	50 (14)	1.1
	一般	102 (22)	102 (22)	88 (20)	77 (15)	1.2
社会体育学科	推薦	50 (18)	50 (18)	48 (18)	47 (17)	1.0
	一般	818 (150)	803 (149)	245 (50)	139 (33)	3.3
推 薦 合 計		631 (189)	631 (189)	548 (173)	545 (172)	1.2
一 般 合 計		3,351 (782)	3,302 (772)	1,219 (271)	824 (186)	2.7
総 合 計		3,982 (971)	3,933 (961)	1,767 (444)	1,369 (358)	

※()は女子内数。*倍率=受験者数÷合格者数

■短大／体育科・保育科

区 分	志願者数	受験者数	合格者数	入学予定者数	*倍率
体 育 科	推薦 77	77	75	69	1.0
	一般 157	154	124	71	1.2
保 育 科	推薦 25	25	24	22	1.0
	一般 56	54	54	37	1.0
推 薦 合 計		102	102	99	1.0
一 般 合 計		213	208	178	1.2
総 合 計		315	310	277	

*倍率=受験者数÷合格者数

■大学／体育学部編入学

出 身	編入学科	志願者数	受験者数	合格者数	入学予定者数
日本体育大学 女子短期大学	体育学科	30	30	3年次 30	30
	健康学科	5	5	2年次 4	4
				3年次 1	1
	社会体育学科	43	43	3年次 43	41
	小 計	78	78	78	76
その他	体育学科	1	1	2年次 1	1
	健康学科	1	1	2年次 1	1
				3年次 1	0
	社会体育学科	1	1	2年次 1	1
	小 計	2	2	2	2
合 計		86	86	86	82

■専攻科

志願者数	受験者数	合格者数	入学予定者数
14	14	14	13

■大学院体育科学研究科

区 分		博士前期課程 本試験(2000.10.21,22)					博士前期課程 二次募集(2001.3.2,3)					博士後期課程 本試験(2001.2.20,21)				
		志願者	受験者	合格者	入学予定者	*倍率	志願者	受験者	合格者	入学予定者	*倍率	志願者	受験者	合格者	入学予定者	*倍率
スポーツ文化・ 社会科学系	合計	5(0)	5(0)	2(0)	2(0)	2.5	7(1)	6(1)	6(1)	6(1)	1.0	1(0)	1(0)	1(0)	1(0)	1.0
	本学	3(0)	3(0)	0(0)	0(0)		5(0)	4(0)	4(0)	4(0)		1(0)	1(0)	1(0)	1(0)	
	他大	2(0)	2(0)	2(0)	2(0)		2(1)	2(1)	2(1)	2(1)		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	
トレーニング科学系	合計	21(3)	18(3)	11(2)	11(2)	1.6	9(2)	9(2)	4(1)	4(1)	2.3	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1.0
	本学	12(1)	12(1)	6(1)	6(1)		5(0)	5(0)	2(0)	2(0)		1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	
	他大	9(2)	6(2)	5(1)	5(1)		4(2)	4(2)	2(1)	2(1)		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	
健康科学・ スポーツ医科学系	合計	10(5)	10(5)	9(4)	9(4)	1.1	2(2)	2(2)	1(1)	1(1)	2.0	6(0)	6(0)	5(0)	5(0)	1.2
	本学	8(4)	8(4)	7(3)	7(3)		2(2)	2(2)	1(1)	1(1)		3(0)	3(0)	3(0)	3(0)	
	他大	2(1)	2(1)	2(1)	2(1)		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)		3(0)	3(0)	2(0)	2(0)	
合 計	合計	36(8)	33(8)	22(6)	22(6)	1.5	18(5)	17(5)	11(3)	11(3)	1.5	8(1)	8(1)	7(1)	7(1)	1.1
	本学	23(5)	23(5)	13(4)	13(4)		12(2)	11(2)	7(1)	7(1)		5(1)	5(1)	4(1)	4(1)	
	他大	13(3)	10(3)	9(2)	9(2)		6(3)	6(3)	4(2)	4(2)		3(0)	3(0)	3(0)	3(0)	

※()は女子内数。本学、他大学は、それぞれの学系の合計の内数。*倍率=受験者数÷合格者数

[募集人員]

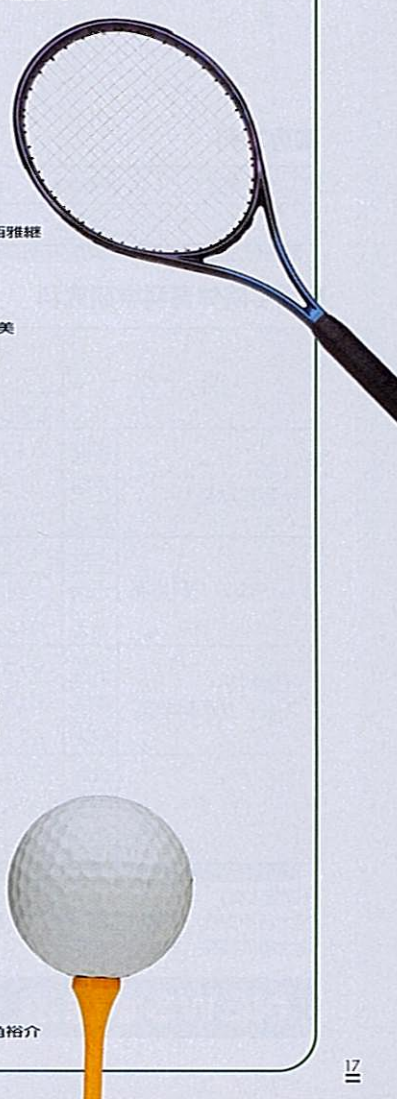
博士前期課程 本試験 25名 二次募集 若干名

博士後期課程 本試験 6名

[下半期クラブの主要大会成績]

学友会・クラブ情報

クラブ名	大会名	結果	氏名・他結果
■アメリカンフットボール部 ■カヌー部	東日本学生王座決定戦 全日本学生選手権	優勝 カヤックフォア 1位 男子総合 準優勝 男子 2位 (男子) 3位 (男子) 優勝	高井健太、堀江譲二、浅見泰規、佐藤将
■ゴルフ部	日米大学対抗選手権 日刊アマゴルフ 朝日杯大学ゴルフ ディクソン全日本サンスポ女子アマゴルフ選手権 全日本大学女子サッカー選手権 全日本女子ジュニア柔道体重別選手権 オリンピック女子柔道 正力松太郎杯全日本学生体重別選手権 世界ジュニア選手権 全国女子体重別選手権 福岡国際女子柔道	2位 優勝 57kg級 優勝 48kg級 金メダル 60kg級 準優勝 女子57kg級 準優勝 48kg級 準優勝 48kg級 優勝 48kg級 3位 女子二段以上の部 優勝 女子初段の部 優勝 男子単独の部 優勝 女子単独の部 優勝 女子二人掛けの部 優勝 団体演武の部 優勝 一般三段の部 優勝 一般女子三段以上の部 優勝 一般女子二段の部 優勝 一般女子初段の部 優勝	太田直己 太田直己 真鍋早彩 吉成麗子 田村亮子 小川武志 吉成麗子 北田佳世 田村亮子 北田佳世 大西由佳子・大八木智子 遠山由香・代々城房枝 藤田敬士 三浦麻美 中村葉子・中川幸江・飯野真由美
■サッカー部 ■柔道部	全日本学生大会	優勝 女子二段以上の部 優勝 女子初段の部 優勝 男子単独の部 優勝 女子単独の部 優勝 女子二人掛けの部 優勝 団体演武の部 優勝 一般三段の部 優勝 一般女子三段以上の部 優勝 一般女子二段の部 優勝 一般女子初段の部 優勝	奥村太一・野呂和功 大西由佳子・中川幸江 秋本恵美・内藤美恵 遠山由香・代々城房枝 樋口まゆみ 佐藤かおり 田島寧子 宮本幸太郎 樋口まゆみ 河田聖良 田島寧子 河田聖良 奥村真奈美 樋口まゆみ 2位 西井亮子 田島寧子 宮本幸太郎
■少将拳法部	全国大会	優勝 高飛込 優勝 100m平泳ぎ 優勝 400m個人メドレー 銀メダル 男子板飛込 3位 女子高飛込 2位 女子400m自由形 3位 女子200mバタフライ 2位 女子200m自由形 3位 女子200m個人メドレー 3位 女子板飛込 優勝 400m個人メドレー 優勝 男子高飛込 3位 競泳女子学校対抗 優勝 飛込学校対抗 優勝(男女) 男子優勝/女子準優勝	奥村太一・野呂和功 大西由佳子・中川幸江 秋本恵美・内藤美恵 遠山由香・代々城房枝 樋口まゆみ 佐藤かおり 田島寧子 宮本幸太郎 樋口まゆみ 河田聖良 田島寧子 河田聖良 奥村真奈美 樋口まゆみ 2位 西井亮子 田島寧子 宮本幸太郎
■水泳部	夏季国体 国体成年女子 オリンピック女子競泳 日本学生選手権	男子回転 6位 男子滑降 58位 男子回転 8位 男子回転 10位 男子回転 10位 男子回転 6位 女子20キロリレー 3位 女子回転 3位 女子5000m 優勝 女子3000m 2位 男子スプリント1000m 優勝 男子スプリント500m 優勝 男子総合1500m 優勝 男子総合得点 2位 女子スプリント500m 3位 女子スプリント1000m 3位 女子総合500m 2位 女子総合1500m 優勝 女子総合3000m 優勝 女子総合5000m 優勝 女子総合得点 優勝 女子総合得点 3位 スピード男子500m 1位 2000mリレー 2位 スピード女子3000m 優勝 スピード女子500m 3位 スピード女子1500m 優勝 女子2000mリレー 優勝 女子対抗得点1位 総合対抗得点1位 女子バラル大回転48位 優勝 75kg級 優勝 85kg級 優勝 無差別級 優勝 成年A 優勝 個人戦 優勝 団体戦 準優勝 個人戦 優勝 男子個人無差別級 優勝 中量級 準優勝 男子シングルス 準優勝	皆川賢太郎 吉岡大輔 皆川賢太郎 皆川賢太郎 皆川賢太郎 皆川賢太郎 佐々木明 佐藤照之 竹ノ内由香 竹ノ内由香 山手新太郎 寺島賀寿生 野本繁 寺島賀寿生 三浦理香 角谷絵美 遠藤弘恵 3位 藤井希望 3位 山本絵美 2位 山本絵美 2位 山本絵美 2位 栗林しのぶ 3位 山本絵美 3位 遠藤弘恵 竹ノ内由香 三浦理香 竹ノ内由香 総合女子優勝 鈴木千裕 垣添徹 郷原貴利 清田英彦 垣添徹 垣添徹 3位 大西雅継 宮本一輝 垣添徹 小出真子 室谷哲也 坂下真知子・清中洋美 室谷哲也・高山知之 沖本理恵・清田瑞紀 浅川陽介・柳田真吾 笠松昭宏 笠松昭宏 西村圭一 笠松昭宏 南友介 中村周平 笠松昭宏 笠松昭宏
■スキー部	水球全日本学生選手権 日本水連2000年度優秀選手 W杯	男子回転 6位 男子滑降 58位 男子回転 8位 男子回転 10位 男子回転 10位 男子回転 6位 女子20キロリレー 3位 女子回転 3位 女子5000m 優勝 女子3000m 2位 男子スプリント1000m 優勝 男子スプリント500m 優勝 男子総合1500m 優勝 男子総合得点 2位 女子スプリント500m 3位 女子スプリント1000m 3位 女子総合500m 2位 女子総合1500m 優勝 女子総合3000m 優勝 女子総合5000m 優勝 女子総合得点 優勝 女子総合得点 3位 スピード男子500m 1位 2000mリレー 2位 スピード女子3000m 優勝 スピード女子500m 3位 スピード女子1500m 優勝 女子2000mリレー 優勝 女子対抗得点1位 総合対抗得点1位 女子バラル大回転48位 優勝 75kg級 優勝 85kg級 優勝 無差別級 優勝 成年A 優勝 個人戦 優勝 団体戦 準優勝 個人戦 優勝 男子個人無差別級 優勝 中量級 準優勝 男子シングルス 準優勝	皆川賢太郎 吉岡大輔 皆川賢太郎 皆川賢太郎 皆川賢太郎 皆川賢太郎 佐々木明 佐藤照之 竹ノ内由香 竹ノ内由香 山手新太郎 寺島賀寿生 野本繁 寺島賀寿生 三浦理香 角谷絵美 遠藤弘恵 3位 藤井希望 3位 山本絵美 2位 山本絵美 2位 山本絵美 2位 栗林しのぶ 3位 山本絵美 3位 遠藤弘恵 竹ノ内由香 三浦理香 竹ノ内由香 総合女子優勝 鈴木千裕 垣添徹 郷原貴利 清田英彦 垣添徹 垣添徹 3位 大西雅継 宮本一輝 垣添徹 小出真子 室谷哲也 坂下真知子・清中洋美 室谷哲也・高山知之 沖本理恵・清田瑞紀 浅川陽介・柳田真吾 笠松昭宏 笠松昭宏 西村圭一 笠松昭宏 南友介 中村周平 笠松昭宏 笠松昭宏
■スケート部	全日本学生スキー選手権 全日本スキー 真駒内選抜スケート スケート学生選手権	女子20キロリレー 3位 女子回転 3位 女子5000m 優勝 女子3000m 2位 男子スプリント1000m 優勝 男子スプリント500m 優勝 男子総合1500m 優勝 男子総合得点 2位 女子スプリント500m 3位 女子スプリント1000m 3位 女子総合500m 2位 女子総合1500m 優勝 女子総合3000m 優勝 女子総合5000m 優勝 女子総合得点 優勝 女子総合得点 3位 スピード男子500m 1位 2000mリレー 2位 スピード女子3000m 優勝 スピード女子500m 3位 スピード女子1500m 優勝 女子2000mリレー 優勝 女子対抗得点1位 総合対抗得点1位 女子バラル大回転48位 優勝 75kg級 優勝 85kg級 優勝 無差別級 優勝 成年A 優勝 個人戦 優勝 団体戦 準優勝 個人戦 優勝 男子個人無差別級 優勝 中量級 準優勝 男子シングルス 準優勝	皆川賢太郎 吉岡大輔 皆川賢太郎 皆川賢太郎 皆川賢太郎 皆川賢太郎 佐々木明 佐藤照之 竹ノ内由香 竹ノ内由香 山手新太郎 寺島賀寿生 野本繁 寺島賀寿生 三浦理香 角谷絵美 遠藤弘恵 3位 藤井希望 3位 山本絵美 2位 山本絵美 2位 山本絵美 2位 栗林しのぶ 3位 山本絵美 3位 遠藤弘恵 竹ノ内由香 三浦理香 竹ノ内由香 総合女子優勝 鈴木千裕 垣添徹 郷原貴利 清田英彦 垣添徹 垣添徹 3位 大西雅継 宮本一輝 垣添徹 小出真子 室谷哲也 坂下真知子・清中洋美 室谷哲也・高山知之 沖本理恵・清田瑞紀 浅川陽介・柳田真吾 笠松昭宏 笠松昭宏 西村圭一 笠松昭宏 南友介 中村周平 笠松昭宏 笠松昭宏
■スノーボード ■相撲部	スノボW杯 全国選抜大学・実業団刈谷大会 全国学生個人体重別選手権	優勝 75kg級 優勝 85kg級 優勝 無差別級 優勝 成年A 優勝 個人戦 優勝 団体戦 準優勝 個人戦 優勝 男子個人無差別級 優勝 中量級 準優勝 男子シングルス 準優勝	総合女子優勝 鈴木千裕 垣添徹 郷原貴利 清田英彦 垣添徹 垣添徹 3位 大西雅継 宮本一輝 垣添徹 小出真子 室谷哲也 坂下真知子・清中洋美 室谷哲也・高山知之 沖本理恵・清田瑞紀 浅川陽介・柳田真吾 笠松昭宏 笠松昭宏 西村圭一 笠松昭宏 南友介 中村周平 笠松昭宏 笠松昭宏
■ソフトテニス部	国体 全国学生相撲選手権 全国大学選抜相撲高知大会 世界選手権(ブラジル) 全日本新相撲選手権大会 アジア選手権 全日本社会人・学生対抗インド大会 全日本総合選手権	個人戦 優勝 団体戦 準優勝 個人戦 優勝 男子個人無差別級 優勝 中量級 準優勝 男子シングルス 準優勝	宮本一輝 垣添徹 小出真子 室谷哲也 坂下真知子・清中洋美 室谷哲也・高山知之 沖本理恵・清田瑞紀 浅川陽介・柳田真吾 笠松昭宏 笠松昭宏 西村圭一 笠松昭宏 南友介 中村周平 笠松昭宏 笠松昭宏
■体操競技部	全日本ソフトテニス オリンピック 全日本選手権	女子優勝 男子ベスト4 女子ベスト4 ベスト4 体操男子総合 4位 男子あん馬 優勝 男子つり輪 優勝 男子跳馬 3位 男子平行棒 2位 男子鉄棒 3位 男子個人総合 2位 男子種目別 (ゆか優勝/あん馬優勝/跳馬3位/鉄棒4位) 大学部門 準優勝	笠松昭宏 笠松昭宏 西村圭一 笠松昭宏 南友介 中村周平 笠松昭宏 笠松昭宏
■チアリーディング部	ジャパンカップ 全日本学生選手権 全日本選手権	優勝 男子団体 2位 女子団体 優勝 優勝 男子 2位 女子 2位 男子バドミントン出場 男子団体 優勝 男子シングルス 優勝 男子ダブルス 優勝 男子シングルス 優勝 男子ダブルス 準優勝 男子エベ 優勝 男子サーブル 準優勝 男子フルーレ 団体3位 女子エベ 準優勝 女子フルーレ団体 準優勝 男子シングルスカル 優勝 シングルスカル 優勝 女子棒高跳 優勝 男子十種競技 2位 100m 3位 フリースタイル58kg級 優勝 フリースタイル63kg級 優勝	舩田圭太 大東忠司 大東忠司・舩田圭太 舩田圭太 舩田圭太・大東忠司 大前賢典 舩田健一 加藤真由美 矢野彰男 矢野彰男 中村明子 平田卓朗 中谷顕子 松尾大士 池松和彦 松尾大士 伊是名正旭 笹本睦 森角裕介 笹本睦 3位 森角裕介
■トランポリン部	全国大学女子大会 全日本学生選手権	優勝 男子団体 2位 女子団体 優勝 優勝 男子 2位 女子 2位 男子バドミントン出場 男子団体 優勝 男子シングルス 優勝 男子ダブルス 優勝 男子シングルス 優勝 男子ダブルス 準優勝 男子エベ 優勝 男子サーブル 準優勝 男子フルーレ 団体3位 女子エベ 準優勝 女子フルーレ団体 準優勝 男子シングルスカル 優勝 シングルスカル 優勝 女子棒高跳 優勝 男子十種競技 2位 100m 3位 フリースタイル58kg級 優勝 フリースタイル63kg級 優勝	舩田圭太 大東忠司 大東忠司・舩田圭太 舩田圭太 舩田圭太・大東忠司 大前賢典 舩田健一 加藤真由美 矢野彰男 矢野彰男 中村明子 平田卓朗 中谷顕子 松尾大士 池松和彦 松尾大士 伊是名正旭 笹本睦 森角裕介 笹本睦 3位 森角裕介
■軟式野球部 ■バスケットボール部	全日本学生選手権	優勝 男子団体 2位 女子団体 優勝 優勝 男子 2位 女子 2位 男子バドミントン出場 男子団体 優勝 男子シングルス 優勝 男子ダブルス 優勝 男子シングルス 優勝 男子ダブルス 準優勝 男子エベ 優勝 男子サーブル 準優勝 男子フルーレ 団体3位 女子エベ 準優勝 女子フルーレ団体 準優勝 男子シングルスカル 優勝 シングルスカル 優勝 女子棒高跳 優勝 男子十種競技 2位 100m 3位 フリースタイル58kg級 優勝 フリースタイル63kg級 優勝	舩田圭太 大東忠司 大東忠司・舩田圭太 舩田圭太 舩田圭太・大東忠司 大前賢典 舩田健一 加藤真由美 矢野彰男 矢野彰男 中村明子 平田卓朗 中谷顕子 松尾大士 池松和彦 松尾大士 伊是名正旭 笹本睦 森角裕介 笹本睦 3位 森角裕介
■バドミントン部	オリンピック 全日本学生選手権	優勝 男子団体 2位 女子団体 優勝 優勝 男子 2位 女子 2位 男子バドミントン出場 男子団体 優勝 男子シングルス 優勝 男子ダブルス 優勝 男子シングルス 優勝 男子ダブルス 準優勝 男子エベ 優勝 男子サーブル 準優勝 男子フルーレ 団体3位 女子エベ 準優勝 女子フルーレ団体 準優勝 男子シングルスカル 優勝 シングルスカル 優勝 女子棒高跳 優勝 男子十種競技 2位 100m 3位 フリースタイル58kg級 優勝 フリースタイル63kg級 優勝	舩田圭太 大東忠司 大東忠司・舩田圭太 舩田圭太 舩田圭太・大東忠司 大前賢典 舩田健一 加藤真由美 矢野彰男 矢野彰男 中村明子 平田卓朗 中谷顕子 松尾大士 池松和彦 松尾大士 伊是名正旭 笹本睦 森角裕介 笹本睦 3位 森角裕介
■フェンシング部	全日本学生選手権	優勝 男子団体 2位 女子団体 優勝 優勝 男子 2位 女子 2位 男子バドミントン出場 男子団体 優勝 男子シングルス 優勝 男子ダブルス 優勝 男子シングルス 優勝 男子ダブルス 準優勝 男子エベ 優勝 男子サーブル 準優勝 男子フルーレ 団体3位 女子エベ 準優勝 女子フルーレ団体 準優勝 男子シングルスカル 優勝 シングルスカル 優勝 女子棒高跳 優勝 男子十種競技 2位 100m 3位 フリースタイル58kg級 優勝 フリースタイル63kg級 優勝	舩田圭太 大東忠司 大東忠司・舩田圭太 舩田圭太 舩田圭太・大東忠司 大前賢典 舩田健一 加藤真由美 矢野彰男 矢野彰男 中村明子 平田卓朗 中谷顕子 松尾大士 池松和彦 松尾大士 伊是名正旭 笹本睦 森角裕介 笹本睦 3位 森角裕介
■ボート部	全日本大学選手権・オックスフォード堀レガッタ 国体成年男子ボート 日本ジュニア選手権 日本学生陸上対抗選手権	優勝 男子団体 2位 女子団体 優勝 優勝 男子 2位 女子 2位 男子バドミントン出場 男子団体 優勝 男子シングルス 優勝 男子ダブルス 優勝 男子シングルス 優勝 男子ダブルス 準優勝 男子エベ 優勝 男子サーブル 準優勝 男子フルーレ 団体3位 女子エベ 準優勝 女子フルーレ団体 準優勝 男子シングルスカル 優勝 シングルスカル 優勝 女子棒高跳 優勝 男子十種競技 2位 100m 3位 フリースタイル58kg級 優勝 フリースタイル63kg級 優勝	舩田圭太 大東忠司 大東忠司・舩田圭太 舩田圭太 舩田圭太・大東忠司 大前賢典 舩田健一 加藤真由美 矢野彰男 矢野彰男 中村明子 平田卓朗 中谷顕子 松尾大士 池松和彦 松尾大士 伊是名正旭 笹本睦 森角裕介 笹本睦 3位 森角裕介
■陸上競技部	全日本学生選手権	優勝 男子団体 2位 女子団体 優勝 優勝 男子 2位 女子 2位 男子バドミントン出場 男子団体 優勝 男子シングルス 優勝 男子ダブルス 優勝 男子シングルス 優勝 男子ダブルス 準優勝 男子エベ 優勝 男子サーブル 準優勝 男子フルーレ 団体3位 女子エベ 準優勝 女子フルーレ団体 準優勝 男子シングルスカル 優勝 シングルスカル 優勝 女子棒高跳 優勝 男子十種競技 2位 100m 3位 フリースタイル58kg級 優勝 フリースタイル63kg級 優勝	舩田圭太 大東忠司 大東忠司・舩田圭太 舩田圭太 舩田圭太・大東忠司 大前賢典 舩田健一 加藤真由美 矢野彰男 矢野彰男 中村明子 平田卓朗 中谷顕子 松尾大士 池松和彦 松尾大士 伊是名正旭 笹本睦 森角裕介 笹本睦 3位 森角裕介
■レスリング部	全日本学生王座決定戦 全日本大学選手権	優勝 58kg級 優勝 63kg級 優勝 団体 3位 グレコローマン58kg級 優勝 グレコローマン97kg級 優勝 58kg級2位	松尾大士 伊是名正旭 笹本睦 森角裕介 笹本睦 3位 森角裕介
■レスリング部	全日本選手権 グランマ国際大会	優勝 58kg級 優勝 63kg級 優勝 団体 3位 グレコローマン58kg級 優勝 グレコローマン97kg級 優勝 58kg級2位	松尾大士 伊是名正旭 笹本睦 森角裕介 笹本睦 3位 森角裕介





このコーナーは、「日体大に関する感想・意見」を取材や投稿により紹介するページです。学生をはじめとして父母・卒業生・高校生・一般の方から、さまざまな感想・意見をいただきました。今後も、「みんなの広場」へ自由な声をお寄せください。

●是非とも合格して！

（入学試験受験生の母親／2月2日東京・世田谷キャンパスにて取材）

2月1日が短大、2日から5日までが大学で、トータル5日間、娘に付き添って福岡から来ました。部活動中心の高校生活だったため、いわゆる受験勉強が不足しているのではないかと心配しております。でも、中学校の時からバスケットを始め、その間、日体出身の先生から指導を受け、その先生への憧れもあって、絶対に日体大に入学する！と、バスケットに関しては一言も弱音をはかずに頑張ってきたようです。日体大でレギュラーになるのは並大抵のことではないと伺っており、バスケットを通じて多くのことを学び、何よりも人間として大きく成長してくれ、たとえ親としては願っていません。その願いが現実のものとなるよう、まずは是非とも合格して欲しいのです。

●本当に楽しい野外実習

（スキー指導実習参加の大学体育学科2年男子／3月1日東京・世田谷キャンパスにて取材）

2月6日から10日まで四泊五日の日程で、志賀高原焼山スキー場で行われた「スキー指導実習」に参加しました。自分が参加した第2回は約400名で編成され、「志賀高原プリンスホテル」に宿泊しました。

実習プログラムではスキー技術の習得は勿論、インストラクターを中心としたグループでのレッ

スン方法や、スキーヤーとしてのホテルの利用方法までも学習することができました。自分自身、技術は初心者程度からのスタートとなりましたが、先生方の丁寧な指導と共通の目標を持った仲間たちの励ましがあった、最終日には「S A J 3級」認定試験にチャレンジし合格することができました。

野外実習にはこれまで海浜実習・キャンプ実習に参加し、開放的な気分から羽目を外して先生に怒られたり、きついプログラムもありましたが、本当に楽しく忘れられない思い出となりました。特に、普段はあまり接点のない日体生とも交友が深まり、学生生活に幅が出てきたように思います。

●残念！無念！でも熱かった！

（関東大学アメリカンフットボール選手権決勝・クラッシュボール・観戦の91年卒業アメリカンフットボール部OB、12月3日さいたまスーパーアリーナにて取材）

自分たちの時代に果たせなかった、「甲子園ボウルのキップ」を手にして欲しい一念で、後輩たちの活躍を親に神奈川から来ました。同じ思いで先輩・後輩たちが集まり、まるで同窓会に参加したような錯覚さえ覚え、アメリカンフットボールを通じて喜びも悔しさも共有した仲間というのは本当に素晴らしいものだと思つて感じました。自分自身、卒業してからはフットボールとは全く無縁の毎日ですが、やはり日体大の血なので、しょうがリーグ戦のことはいつも気になるし、今日の試合は本当に楽しみにしていました。結果は

残念ながら7年ぶりの甲子園とはなりませんでしたが、後輩たちのプレーには本当に熱くさせられました。関東の大学アメリカンフットボールは戦国時代といわれてますが、その中で今後強い日体大を築き上げていただきたいと、関係の先生方や後輩たちにエールを送ります。

●貴重な体験 思い出

（平成12年度 日本体育大学公開講座「参加の世田谷区在住女性、アンケートから抜粋」）

Q 公開講座を知ったのは？

A 息子が小学校で配布された「日本体育大学公開講座」の案内を持ち帰ったものを見て。

Q 参加した理由は？

A 現在、3年生の息子は幼稚園のころから運動が大好きで、特に今日はサッカーができることをとても楽しみにしていたので参加しました。

Q 参加への感想は？

A サッカーの他に器械運動、バスケットも体験することができて、息子は喜んでいました。また、大学の広い充実した施設には、私もそうですがビックリしてました。普段なかなか体験できない大きな施設で思いっきりからだを動かしたことは、きつと貴重な思い出として残ると思います。ただ、欲を言わせていただきますと、オリンピック選手をはじめトップ選手たちの「一流のプレー」を間近で見てあげたかったと思いました。

私は体力測定講座に参加したのですが、自覚はあったものの、改めて測定の結果を数値で知

●もっと参加させて！

（ニッタイフェスティバル・学園祭参加の女子高校生、11月3日横浜・健志台キャンパスにて取材）

“スポーツ”といえば日体大の学園祭に、友達3人で来ました。まずはキャンパスの広さに超ビックリ！陸上競技場・テニスコート・サッカー場・ラグビー場、野球場、プール（高飛びのプールを見たのは初めてで感動）、何から何まで勢ぞろい。建物もみんな綺麗で、テニヤやつる友達なんか“どうやらこの大学に入るんだらう……”と、マジになってました。でも、学園祭自体のプログラムにはちょっと不満です。って言うのも、日体大の学園祭だからいろんなスポーツの一流選手のプレーが見れたり、一緒に試合なんかできたり、そんなイメージを持ってたんです。エアロビ、ゴルフ、テニスなどいくつか参加できたのですが、もっともっと盛んでもいいと思いました。

■このコーナーへ、手紙・FAXで自由な声をお寄せください。

〒158-8508 東京都世田谷区深沢7-1-1 日本体育大学
NITTAI DAI みんなの広場宛
FAX / 03-5570-0949

dot. NITTAI

■学年暦 (平成13年<2001>度上半期)

月	日(曜日)	行事
4	3(火) 4(火)~10(火)	入学式(横浜健志台キャンパス) 新入生オリエンテーション (健康診断、スポーツテスト、学生証手続、履修申告、他) 在学生 健康診断、学生証手続、履修申告確認等 前学期授業開始
	11(水) 16(月)~	大学 看護実習(健康学科4年) [5/26(土)まで]
6	4(月)~23(土) 4(月)~30(土)	教育実習(大学4年)、教育実習2(短大保育科2年) 教育実習(短大体育科2年)
7	3(火)~16(月) 8(日)~12(木) 18(水)~24(火) 24(火) 25(水)~	大学 海浜実習(1年) 短大体験学習(1年) 前学期定期試験期間 前学期授業終了(試験を含む) 夏季休業 [9/30(日)迄]
	27(金)~30(月) 31(火)~	大学 看護学実習(健康学科3年) [9/4(火)迄] 大学 社会教育実習(社会体育学科社会教育コース3年) [9/29(土)迄] 短大 キャンプ実習(保育科2年) 大学 ゴルフ指導実習(体育学科2年) [8/3(金)迄] 第1回 大学 ゴルフ(学外集中実技)(社会体育学科3年)
8	6(月)~9(木)	大学 ゴルフ指導実習(体育学科2年) 第2回 大学 ゴルフ(学外集中実技)(社会体育学科3年)
9	1(土)~11(火) 20(木)~29(土) 20(木) 25(火)~28(金) 27(木)~30(日)	大学 キャンプ理論・実習(社会体育学科2年) 大学 水泳指導実習・ダイビングコース(体育学科 3年) 開学記念日 大学 ゴルフ指導実習(体育学科2年) 第3回 大学 ゴルフ(学外集中実技)(社会体育学科3年) 大学 水泳指導実習・日赤水上安全法コース(体育学科3年)

■新採用教員紹介



竹宮 隆
[大学教授]
大学院トレーニング科学系担当
東京教育大学体育学部健康学科卒
医学博士



西山哲成
[大学助教授]
身体動作学担当
日本体育大学大学院体育学研究科修了
医学博士 体育学修士



本多洋実
[大学講師]
社会福祉担当。
日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科修了
社会福祉学修士



田中 信行
[大学講師]
社会福祉担当
中京大学大学院体育学研究科修了
体育学修士



山口和之
[大学講師]
外国語担当
明治学院大学大学院文学研究科修了
文学修士



竹林実紀子
[短大保育科講師]
保育学担当
国立音楽大学幼児教育科卒



三宅良輔
[短大体育科講師]
専門6(体操)担当
日本体育大学大学院体育学研究科修了
体育学修士

第17回睡眠環境シンポジウム (第10回睡眠環境学会)

主催: 日本睡眠環境学会 大会長: 黒田 稔 (日本体育大学)

開催期間: 平成13年9月13日(木)~14日(金)

開催場所: 「湯本富士屋ホテル」(箱根登山鉄道 箱根湯本駅前)

〒250-0392 神奈川県足柄下郡箱根町湯本256-1 TEL: 0460-5-6111 FAX: 0460-5-6142

- A. 招待講演: 寝室環境とアレルギー疾患
- B. パネルディスカッション I: 「寝装・寝具と快適な睡眠環境への科学的アプローチ」
- C. 寝具評価・睡眠実験体験セミナー「寝具性能の測定と睡眠評価を考える」
- D. 研究発表(公募)
- E. サンセットほろ酔いセミナー
対談「睡眠研究の裏話」鳥居鎮夫(東邦大学名誉教授) 佐々木三男(慈恵医科大学看護婦学校校長)
- F. 市民公開講座: 「健康と眠りー温泉で身体を癒し、あなたの眠りを考える一日ー」
「快適な眠りと運動・入浴・アルコール、そして寝装寝具」他

●問い合わせ: 日本体育大学 横浜・健志台キャンパス 人文科学研究室内
第17回睡眠環境シンポジウム大会事務局
〒227-0032 横浜市青葉区鶴志町121-1 TEL & FAX 045-963-7945
ホームページ <http://www11.nittai.ac.jp>
e-mail sse2001@nittai.ac.jp

第9回日本運動生理学会大会

—21世紀・運動生理学の展望—

会 期 2001年7月31日(火)、8月1日(水)

会 場 日本体育大学 横浜・健志台キャンパス

大会長 中野昭一 日本体育大学大学院 体育科学研究科長

<プログラム概要>

シンポジウム

(1) 局所筋の酸素・エネルギー代謝の測定と今後の展望

座長: 栗原 敏 (東京慈恵医科大学・教授、学長)

浜岡隆文 (東京医科大学・講師)

(2) 呼吸と運動

座長: 圓 吉夫 (日本体育大学・教授)

本間生夫 (昭和大学医学部・教授)

(3) 新しい運動療法への運動生理学的アプローチ

座長: 矢部京之助 (大阪体育大学大学院・教授)

米本恭三 (東京保健科学大学・教授、学長)

(4) NATAの公認アスレティックトレーナーのglobalizationについて

座長: 堀居 昭 (日本体育大学・教授)

山田 保 (日本体育大学・教授)

●問い合わせ: 大会事務局

〒158-8508 東京都世田谷区深沢7-1-1 日本体育大学 TEL & FAX 03-5706-0942

大会ホームページ <http://www4.ocn.ne.jp/~ex-phy-9/>

e-mail ex-phy-9@titan.ocn.ne.jp

【編集後記】 2001年、21世紀のスタート!

4月3日入学式から記念すべき21世紀最初の新入生となる学生と保護者の方に、心からお祝い申し上げます。大学・短大、学生各々の修業年限の違いはあっても、在学中は入学生としての気持ちをいつも胸に、勉学にスポーツに食欲となって学生生活を送っていただきたいと思います。そして何より大切となるであろう財産は、「人と人との絆」。友達、先輩後輩、先生、……そのネットワークを広げるのは、みずからの行動力であることを知っておいてください。

本誌「NITTAIDAI」も創刊号をご覧いただきのご意見・ご感想を参考とさせていただきながら、みずからの企画力・情報力・行動力を身に付けて豊かな情報を提供してまいりたいと思っております。